

シャルトル大聖堂「王の扉口」装飾小円柱

—— 修復と変更の歴史 ——

木 俣 元 一

はじめに

シャルトル大聖堂西正面「王の扉口」の側壁に並ぶ人像円柱の間に配された装飾小円柱(註1)の受けたさまざまな種類の改変(その中には破壊行為や修理,そしてそのどちらとも判別しかねるような行為が含まれる)を歴史的にあとづけ,どこまでが後世の変更の結果であり,どこまでが当初の状態であるかを知ることが,その本格的な研究の前提となる。したがって,ここでは,各種の文献の中で過去に行われた建築や彫刻の記述,過去の視覚的資料(スルス・イコノグラフィック)(デッサン,スケッチ,版画,写真など),各種のアルシーヴ(古文書保管所)に保存される未刊行の修理資料などを用いながら,シャルトルの装飾小円柱が受けた状態の変化をできる限り精密に追ってゆくことにしたい。

まずはじめに,こうした資料について簡単に紹介する。

シャルトル大聖堂および「王の扉口」そのものを扱う膨大な文献の中で装飾小円柱の記述を伴うものはきわめて僅かであるに過ぎない。例えば,十七世紀初頭にセバスティアン・ルイヤーが行った「王の扉口」の記述は,現存する中で最も早い時期のものの一つであるが,そこには人像円柱への言及は見られる一方,装飾小円柱については一言も触れていない(註2)。また,一八五六年と一八五八年に大聖堂を訪ねたフランソワ・ド・ギレルミーも,かなり詳しい記述を「王の扉口」について残しているが,装飾小円柱に関する部分はひじょうに短く,「これらの入口のそれぞれには,サン＝ドニに見られるような装飾のある円柱がある」とだけ書いている(註3)。一八八二年に刊行されたビュルトー神父の論考(註4)は,黄道十二宮の象徴と十二月の労働を表す小円柱のドラム(no.35:D.g.2.b.)(註5)についてかなり詳しい記述を行っている(註6)が,そのほかの小円柱は彼の関心の外にあった。これよりも後に行われた記述は簡略で,ときに実際の作品を明らかに無視した誤ったものも見られる。

こうした書かれた資料に較べると,視覚的資料ははるかに豊富に残されているとともに,より正確で詳細な情報を装飾小円柱に関して与えてくれる。もちろん,これらの視覚的資料も,その使用にあたってはじゅうぶん慎重でなければならないことも確かであるとしても。

「王の扉口」の装飾小円柱に関する,現存する最古の視覚的再現は,ロジェ・ド・ゲニエー

ルのもとで仕事をしたデッサン家によって一六九六年に残された(註7)。これらのデッサンは、小円柱についてはあまり正確とは言えないにしても、全くの想像力の産物というわけでもない(註8)。これらのデッサンの詳細な観察から、少なくともいくつかの小円柱は一六九六年以降その位置を変えておらず、さらに「王の扉口」の左右の両端部(すなわち左入口左側壁の左端と右入口右側壁の右端)には無装飾のものであれ、装飾を伴うものであれ、小円柱は何ら存在していなかったことが明らかとなる。両端部に現在見ることのできる無装飾の小円柱は、後に行う考察で示されるように、十九世紀後半に設置されたものである。

しかし、これら以外の装飾小円柱が全くない箇所(G.d.4., D.g.1., D.d.1.)に関しては、コレクション・ゲニエールのデッサンは正確ではなく、十七世紀末にそこに装飾小円柱が存在したのか、そうでないのか、という問いに答えることはできない。

十九世紀に製作された版画のほとんどは、二、三の例外を除いて(註9)小円柱の細部を正確に再現してはいない(註10)。

これに対し、数多くの写真により、「王の扉口」のたどった変化を段階的に追うことができる。そのうちの最も古いものは十九世紀半ばに撮影された。とくに、ネーグルとル・セックの写真は、後述するようにラッスュがシャルトル西正面の大規模な修復に取り掛かる十九世紀半ば以前の状態を伝えてくれるという点で重要である(註11)。

シャルトル大聖堂及びそこで行われた修理工事などに関する記録文書は、パリの国立古文書保管所(註12)、歴史的記念建造物古文書保管所(註13)、シャルトルのウール＝エ＝ロワール県立古文書保管所(註14)に分散して保存されている。これらの文書は、上述の視覚的資料と併せて用いることで、きわめて有効なものとなる。とりわけ、彫刻や建築の状態の変化を取り巻く状況がどのようなものであったかなどについて、多くの有益な情報をもたらしてくれる。

これまで簡単に紹介してきた資料から判断するところによると、装飾小円柱を含めたシャルトル西正面に関しては、一世紀以上を隔てた二つの時期に集中して行われた、大きな改変がみとめられる。これら二つのうち最初のもは、十九世紀半ば、ジャン＝バティスト・ラッスュがシャルトルの教区の建築家となり、シャルトル大聖堂の大規模な修理工事を実行したときのものである。もうひとつは、一九六七年、一九七二年頃のもので、このときには「王の扉口」のいくつかの人像円柱が取り外され、コピーと置き換えられた。そのとき同時にいくつかの損傷の著しい装飾小円柱も取り外されコピーに置き換えられている。これら二つの修理工事はともに、他の彫刻だけでなく装飾小円柱にも特筆すべき変化をもたらした。以下、そのそれぞれについて詳しく考察してゆくことにする。

1. 十九世紀の修復

シャルトル教区担当の建築家となる前から、ジャン＝バティスト・ラッスユ（註15）は、大聖堂「王の扉口」の彫刻の損傷を嘆いていた（註16）。一八四八年十二月二三日の日付をもつ彼の手紙を引用しよう。

「歴史だけでなく芸術との関連からも、西正面の三つの入口の全ての彫刻はこのうえない意義を示す。この扉口は比類のないものだ。だが不幸なことに、彫像、円柱、小円柱の石材は、崩壊し、塵となって落ちている。冬が来る度に、雨や霜が、これらのたいへん貴重で脆い彫刻を押し流したり、角を削りとったりしている。（註17）」

この手紙の中の「小円柱」という言葉が、我々が対象としている、人像円柱の間の装飾小円柱を指していることは、彼がここでは彫刻について語っていることから窺われる。事実、彼は剝離しようとする小円柱の彫刻をモルタルで固定するという措置をとっている。この作業は、一八五三年以降、おそらくは一八五四年に行われたと考えられる。例えば、一八五三年六月二日の日付をもつ修復の見積書には、彫刻の固定のために「剝離した部分の再接合のために、ケイ酸質のモルタル...一五〇フラン」と言及されている（註18）。さらに、一八五三年七月二〇日の日付をもつ修復の見積書には、「調合したセメント、労働者の日当...二〇フラン」という言及が見いだされる（註19）。最終的に二九五・六八フランという総額の見積書が、一八五三年八月二九日に承認されている（註20）。実際、小円柱のドラムの一つ（No.32：C.d.4.a.）の頂部に見られる欠損部（図1）は、ル・セックが一八五二年に撮影した写真では、モルタルないしセメントで埋められてはおらず、こうした修理が一八五三年以降ラッスユの指揮のもとで行われたことを支持する（註21）。こうした補修の跡は、次のドラムに見られる。no.13：G.d.2.c.（図2）；no.14：G.d.2.d.（図3）；no.26：C.d.1.a.（図4）；no.32：C.d.4.a.（図1）

また、ラッスユは、十九世紀半ばの修理工事の際に、おそらく一八五四年に、「王の扉口」の彫刻を固定していた鉄製の補強材を除去した。装飾小円柱のいくつかに観察できる補強材の痕跡はこうした操作の結果生じたと考えられる。こうした痕跡は、中央入口左側壁のドラム（no.19：C.g.2.a.）の下から四六・五センチの部位（図5）、中央入口右側壁のドラム（no.28：C.d.2.a.）の下から五一センチの部位（図6）に見られる。

前述のモルタルないしセメントによる欠損部の充填、そして鉄の補強材の除去が一八五四年に行われたと推定する根拠は、一八五五年一月二五日の日付をもつヴィオレ＝ル＝デュックに宛てられたラッスユの報告書（註22）にある。この報告書の中でラッスユは前年モルタル等による彫刻の補強並びに鉄の補強材の除去を行ったと述べているのである（註23）。

すでに、ロジェ・ド・ゲニエールのもとで働いていたデッサン家が1696年に描いた作品を用いて、「王の扉口」左右両端部にはその時点では装飾を伴うものであれ、無装飾のものであれ小

円柱は存在しなかったことを述べた。現在これらの位置に配置されている無装飾の小円柱 (G.g.3, G.d.4, D.g.1, D.d.1, D.d.3.) は、ラッスュの死後その後任としてシャルトル大聖堂の修理を担当したE・ボエスヴィルヴァルドの指揮のもとで、一八五九年に設置されたと考えられる。この年の職務内容を記載した帳簿に、人像円柱の欠けている箇所を埋めるために用いた円柱のことが言及されている(註24)。さらにこれらの記述の中に、その直径が装飾小円柱のそれに該当する小円柱が含まれている(註25)。

2. 二十世紀の修復

「王の扉口」の第二期修復工事は一九六〇年以来なされていた要請に答えるものであった(註26)。この修復工事に関しては、記念建造物保護局(モニュマン・イストリック)に保管されている文書からかなりの情報を得ることができる(註27)。しかし、残念ながら、これらの文書には装飾小円柱に関する情報は含まれていない。

このときの工事は、損傷の著しい人像円柱を取り外し、それをコピーに置き換えることに主たる目的があった。そのとき同時に装飾小円柱の一部も取り外され、コピーと置き換えられた。人像円柱の取り外しは、一九六七年一月二二日に開始された。小円柱の取り外しも、この時点以降に行われたと推測される。なぜなら、小円柱を取り外す前に、まず二つの人像円柱(シャドフォーのナンバリングによれば、VIIIとXVIII)を取り外す必要があったからである。人像円柱VIIIは、一九六七年一月二二日に取り外され、人像円柱XVIIIは一九六七年三月二二日に取り外された。いずれにしても、これらの小円柱は、一九七〇年に刊行されたザウアーレンダーの著作(註28)のためにマックス・ヒルマーが「王の扉口」の写真撮影を行った時点には、すでに取り外されていた。取り外された小円柱は、人像円柱とともに、シャルトル大聖堂地下のサン＝マルタン祭室に保存されている。

これらの取り外された小円柱に置き換えられることになるコピー(その中には全くの創作によるものも含まれるが)は、二人に彫刻家、すなわちC・ピュベリエ Pubellier 夫人とG・ブルデ Bourdet 夫人により製作された。これらのコピーは、一九七二年に現在の位置に設置された(註29)。

次に取り外された小円柱と、コピーに言及することにしよう。

取り外された小円柱の要素は以下の三つである。1)当初中央入口左側壁の入口から数えて四つめの小円柱の最下部のドラムであったもので、現在は途中から折られて二つの断片(no.41, 42)になっている(図7,9)。2)同じ小円柱の下から二つめのドラムであったもの(no.43)(図11)。3)当初右入口左側壁の入口から数えて三つめの小円柱の下から二つめのドラムであったもの(no.44)(図13,14)で、上部に損傷の跡が見られる。これらの彫刻については別の機会に詳しく言及する。

一九七〇年に製作され、一九七二年に設置された要素は四つある。1) 現在中央入口左側壁の入口から数えて四つめの小円柱の最下部のドラムとなっているもので、当初その位置にあったもの (no.41,42) のコピーである (no.45) (図8,10)。2) 現在同じ小円柱の下から二つめのドラムとなっているもので、当初その位置にあったもの (no.43) のコピーである (no.46) (図12)。3) 現在右入口左側壁の入口から数えて三つめの小円柱の下から二つめのドラムとなっているもので、当初その位置にあったもののコピーである (no.47) (図15)。4) 現在右入口左側壁の入口から数えて三つめの小円柱の下から三つめのドラムとなっているもので、これはモデルの存在しない純粹な創作である (no.48) (図16)。

no.41,42とそのコピーである no.45については、黄道十二宮の「双子座」(図7,8)や「魚座」(図9,10)の象徴など細部の比較から、このコピーがオリジナルにきわめて忠実であることがわかる。同様の結論は、他の二つのコピー (no.46,47)にも下せる。no.43に見られる「十月」(図13)や「五月」(図14)の表現がそのまま no.47 (図15)に見いだせる。これらのモチーフの細部ばかりでなくそれらの配列も忠実に再現されている。

以上の考察から、シャルトル大聖堂「王の扉口」装飾小円柱は、十九世紀、二十世紀を通じてほとんど当初の状態に変更が加えられていないことが明らかとなる。

したがって、ここには十二世紀半ばの彫刻に関する貴重な資料が大量に残されているのであるが、問題なのは、その保存状態が年々悪化していることである。

註

(註1) これらの小円柱に関しては、以下の拙論を参照。KIMATA (Motokazu), *Les colonettes ornées du Portail Royal de la cathédrale de Chartres: Origines et diffusion d'un motif architectural*, 3 vols., doctrat de 3e cycle, Université de Paris I, 1987; 「シャルトル大聖堂「王の扉口」装飾小円柱」『美術史』第125冊(美術史学会編 平成元年) pp.1-16.

(註2) ROUILLARD (Sébastien), *Parthénie, ou Histoire de la très-auguste église de Chartres, dédiée par les vieux druides en l'honneur de la Vierge qui enfanteroit, avec ce qui s'est passé de plus mémorable au faict de la seigneurie... de la dicte église, ville et pais chartrain*, Paris: R.Thierry et P.Chevalier, 1609, 2 parties en 1 vol., p.132.

"Pour entrer en icelle église, y ha trois portes principales, chacune d'icelles accompagnée de deux autres portes aux costez. La première et maistresse surnommée la Roialle, pour ce que c'est par icelle, que le Roi est receu en la dicte Eglise, et regarde l'Occident. Elle auoit dehors vn grand escalier pour y montrer, maintenant caché dessous terre, à cause que le cloistre de la dicte Eglise auroit de depuis esté releué en l'estat qu'on le void de present, de sorte que dudict escalier ne se voient plus à present que quatre ou cinq degrez. la seconde porte est tournée vers le Midi; et la troisième vers le Septentrion.

Toutes lesquelles portes sont enrichies d'histoires y posées, taillées de graueure excellente. Avec ce qu'elles ont l'embellissement d'vne infinité de haultes coulomnes, sur lesquelles est

posé si grand nombre d'images, plus haultes que la stature commune, et d'un si admirable artifice, que les vnes pour les autres se desrobent de la veuë; et ne scait on, ni sur quelles s'arester, ni de la quelle faire le plus d'estime."

(註3) GUILHERMY (Baron François de), Paris, Bibliothèque nationale, Département des manuscrits, collection Guilhermy, 5, Description des localités de la France, V, Nouvelles acquisitions françaises 6098, folio 188 recto. 西正面に関する部分を以下に転写する。"La magnifique façade de la cathédrale, terminée en 1145 est un chef-oeuvre de cette époque reculée. Trois portes mystérieux emblème de la Trinité divine, donnent, suivant l'usage, entrée dans le temple. La principale est accompagnée de huit statues colossales de rois, reines, princes et princesses en costume d'apparat, la tête appuyée sur le nimbe, symbole de sainteté ou de puissance. Les vêtements des femmes, surtout, abondent en détails précieux. Leurs tuniques en étoffes gaufrées sont toutes bordées de pierres et d'orfèvrerie; leurs cheveux nattés et entrelacés de rubans tombent avec grâce jusqu'à la ceinture.

Dans un article inséré aux mémoires de la Société des Antiquaires de France, tome 4, page 188, le chevalier de Fréminville a donné de très bizarres détails sur ces statues, qu'il a voulu toutes baptiser de noms historiques mérovingiens. Dans le tympan apparaît l'image du Christ dans la gloire, placé entre les quatre animaux de l'apocalypse; à ses pieds sont les douze apôtres et les évangélistes. on remarque la fière tournure de ces symboles apocalyptiques; le lion a les yeux incrustés de pierres noires; on retrouve cette même singularité à une figure de femme de la même porte; les animaux ainsi posés.

ange aigle

lion boeuf

Les bas-reliefs de la porte de droite représentent, l'Annonciation, la Visitation, la Naissance du Sauveur, la Vierge couchée en un lit à plafond sur lequel est posée la crèche, la Vierge portant son divin fils, ?le couronnement de Marie entouré de la foule glorieuse des anges et des bienheureux? Tympan de la porte de gauche, l'Ascension, je crois; anges et apôtres. Cinq statues dans le même goût que celles dont nous venons de parler complètent la décoration de chacune de ces portes latérales. des anges jouant de mille instruments des formes les plus variées, et des figures relatives aux signes du Zodiaque ou aux travaux des douze mois garnissent les voussures des trois entrées. Quelques chapiteaux histroïés reproduisent plusieurs scènes tirées des Saintes Ecritures.

Zodiaque: Arts libéraux. Voussures de la porte centrale, les 24 vieillards; de la porte de gauche, les signes et travaux des mois; de la porte de droite, les scènes et arts, entre-autres en écrivain, la grammaire livre et verge en main, la musique frappant sur des clochettes. Les montant de ces portes sont garnis de personnages; un de ceux de la porte de droite, tient une banderole sur laquelle le mot *Geremias*. A chacune de ces portes, plusieurs colonnes ouvragées, comme il y en a à S.Denis.

Rose. on regarde la grande rose à compartimens découpés comme un des premiers essais en ce genre. Elle d'une vigueur admirable.

Nom d'artiste. Au pied droit de la porte centrale, à main droite, au sommet on lit en grandes lettres onciales derrière une statuette dont la tête a été brisée: *Rogerus*; est-ce un nom d'artiste sculpteur ou architecte? un autre nom *Robertus*, m'a-t-on dit, se lit à une des baies du porche-nord, sous des sculptures représentant David et Goliath.

Rois. Seize figures royales sont rangées au dessus du pignon qui couronne le milieu de la façade, et en duquel on voit la Vierge portant le Christ dans ses bras. Ce pignon ainsi que ceux des croisillons a été refait au X^{IV}e siècle.

Statues royales. Monfaucon a donné les gravures d'un grand nombre des statues des trois portes. Mais entraîné par son amour pour l'antiquité, il cherche à leur assigner sans preuve une époque antérieure à la construction du monument dont elles font un des principaux ornemens."

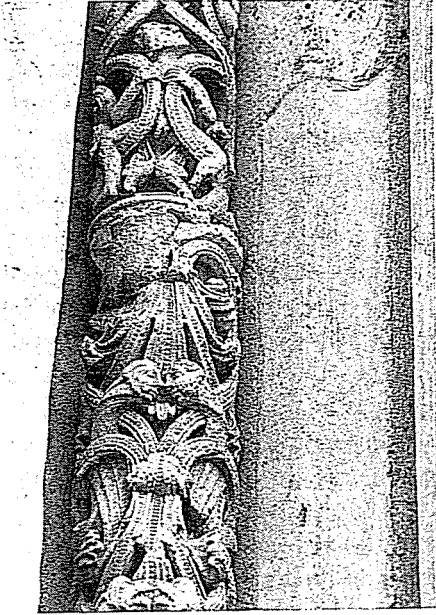
- (註4) BULTEAU (M.-J.), "Etude iconographique sur les calendriers figurés de la cathédrale de Chartres," in: *Mémoires de la Société archéologique d'Eure-et-Loir*, 7(1882), pp.197-224.
- (註5) 本稿での小円柱ドラムのナンバリングは、筆者の博士論文でのものに従う。シャルトルの小円柱の完全なカタログは別の機会に刊行する予定。四つのアルファベットと数字を組み合わせた表記は、各要素の扉口内における位置を示す。最初の大文字のアルファベットは、三つの入口のどれであるかを示す(C.:中央入口, D.:右入口, G.:左入口)。次の小文字のアルファベットは左右の側壁のどちらであるかを示す(d:右側壁, g:左側壁)。次の数字は、入口から数えていくつめの小円柱であるかを示す。最後のアルファベットは、それぞれの小円柱で下から数えていくつめのドラムであるかを示す(a:一つめ, b:二つめ, c:三つめ, d:四つめ)。
- (註6) ビュルトーの記述には誤りも含まれている。
- (註7) Paris, Bibliothèque nationale, Cabinet des Estampes, Va.28, Topographie de la France, Département de l'Eure-et-Loir, Chartres, tome 4, la cathédrale, H 120338-120353 (マイクロフィルム)。
- (註8) これらのデッサンに関するシャドフォーの研究は、人像円柱にのみ関心を向けたもので、そこには装飾小円柱に関しての言及はない。cf. CHADEFAX (M.-C.), "Le Portail Royal de Chartres," *Gazette des Beaux-Arts*, 76(1970), p.273-284.
- (註9) 例えば, WILLEMIN (N.-X.), *Monuments français inédits pour servir à l'histoire des arts depuis le VI^e siècle jusqu'au commencement du XVII^e, choix de costumes civils et militaires, d'armes, armures, instruments de musique, meubles de toute espèce et de décorations intérieures et extérieures des maisons dessinées, gravées et coloriées d'après les originaux par N.-X. Willemmin, classés chronologiquement et accompagnés d'un texte historique et descriptif par André Pottier*, Paris, 1825, pl.87; VIOLLET-LE-DUC (E.), *Dictionary raisonné de l'architecture française du XI^e siècle au XVI^e siècle*, Paris, 1867-, tome 3, p.211, fig.45, tome 8 p.499, fig. 4.
- (註11) 例えば, ヴィオレ＝ル＝デュックによる一八三四年の版画。参考図版として, cf. AUZAS (P.-M.), *Eugène Viollet-le-Duc*, Paris, 1965, pl.7.
- (註11) Paris, Bibliothèque nationale, Cabinet des Estampes, Ve 645, in-fol., *La cathédrale de Chartres, la cathédrale d'Amiens. Recueil factice de photographies par Le Secq*, 1851; Archives des Monuments Historiques, archives photographiques, clichés 001.P.314, 001.P.315, 001.P.316; ネガ番号のない一枚の写真がある(Eure-et-Loir, boîte no.7, chemise 1)。
- (註12) Paris, Archives Nationales, Série F-19-7679, 7680; Série F21-1832.
- (註13) Paris, Archives des Monuments Historiques, Eure-et-Loir, 462-1(1838-1909), 462-2(1910-1920), 462-3(1921-1926), 462-4(1930-1936), 462bis-5(1937-1940), 462bis-6(1941-1954), 462ter-7(1955-1963), 462ter-8(1964-1972)。
- (註14) Chartres, Archives départementales d'Eure-et-Loir, Série V 40-V 44; Série V 54-V 62.
- (註15) ラッスュに関しては, cf. LENIAUD (Jean-Michel), *Jean-Baptiste Lassus (1807-1857) ou le*

temps retrouvé des cathédrales, Bibliothèque de la Société française d'archéologie, 12, Paris, 1980.

- (註16) 一八四四年六月二一日の手紙がシャドフォーにより引用されている。cf. CHADEFAX, *op. cit.*, p.280-281; LENIAUD, *op. cit.*, p.105.
- (註17) "Sous le rapport de l'histoire et de l'art même, toutes les sculptures des trois portes de la façade occidentale présentent le plus haut intérêt, ce portail est unique, mais malheureusement la pierre des statues, colonnes et colonnettes, se décompose et tombe en poussière; tous les hivers la pluie et la gelée entraînent ou arrondissent une partie de ces sculptures si précieuses, et si délicates." Paris, Archives Nationales, Série F19-7679. *Rapport adressé à Monsieur le Ministre de l'Instruction publique et des Cultes par M. Lassus, architecte, Paris, le 23 décembre 1848.*
- (註18) Paris, Archives Nationales, Série F 19-7679, *Devis des travaux de consolidation & de la silicatisation, procédé Rochas, appliqué par MM. Rochas & Dalamagne, aux sculptures de la porte occidentale de la cathédrale, Paris, le 2 juin 1853.*
- (註19) Chartres, Archives départementales d'Eure-et-Loir, Série V 54, *Devis des travaux de consolidation et de silicatisation (procédé Rochas) par A. Rochas et L. Dalamanger, aux sculptures de la porte royale de la cathédrale de Chartres.*
- (註20) Chartres, Archives départementales d'Eure-et-Loir, Série V 54, Lettre du ministre de l'Instruction publique et des Cultes, datée de Paris et du 29 août 1853: "Monsieur le Préfet, vous avez soumis à mon approbation le devis que Mr. l'architecte Lassus a été autorisé à préparer pour l'application, à titre d'essai, du procédé Rochas, à une portion restreinte des sculptures extérieures les plus endommagées de la cathédrale de Chartres. J'approuve ce devis dont le montant est de 295F,68c et je vous autorise, Monsieur le Préfet, à donner des ordres pour l'exécution des ouvrages par voie d'économie. Il sera pourvu au paiement de la dépense, sur la production des mémoires réglés par l'architecte et visés par vous. ci-joint le devis approuvé."
- (註21) Archives des Monuments Historiques, cliché non numéroté (Eure-et-Loir, boîte no.7, chemise 1).
- (註22) Paris, Archives Nationales, Série F 19-7679, *Rapport de l'architecte diocésain sur les dépenses à faire en 1855, 25 janvier 1855.*
- (註23) 同上。以下その一部を転記する。"...Les essais de silicatisation des anciennes sculptures de la porte royale ayant parfaitement réussi et l'emploi de ce procédé devant être considéré comme le seul moyen de prévenir les accidents que j'ai été dans la triste nécessité de signaler tous les ans à Votre Excellence à la suite de l'hiver. J'ai dû à reporter 58,750,88. J'ai dû profiter à la fois & de la saison favorable, & des échafaud pour faire l'application de ce procédé. Je suis heureux de vous signaler, Monsieur le Ministre, l'excellence de cette opération qui aura pour résultat de sauver quelques parties plus ou moins importantes. En faisant exécuter cette délicate opération j'ai fait enlever tous les scellements en fer, & disparaître par conséquence une des principales causes de destruction. Il restait maintenant à exécuter un travail bien important dans l'intérêt de la conservation de ces précieuses sculptures, je veux parler de retablissement des trois archivoltes saillantes qui couronnant les arcs des trois portes, empêchaient les eaux pluviales de couler sur toutes les sculptures & de les détériorer. Aujourd'hui ces trois archivoltes sont entièrement ruinées et leur état de

dégradation est tel que l'eau pénètre à travers les joints & passe derrière les sculptures. Malgré l'état déplorable de ces trois arcs il reste encore cependant assez de fragments des riches ornements sculptés dans chacun des claveaux pour qu'il soit possible de les rétablir avec une certitude complète, aussi ai-je profité de l'échafaud pour faire estamper ces admirables ornements. Je propose donc, Monsieur le Ministre, comme mesure de la plus grande urgence de rétablir ces trois archivolttes saillantes..." 「王の扉口」の三つのアーキヴォルト外縁を囲む装飾文様の帯は後年それを模した彫刻に置き換えられるが、それを示唆するような箇所が見られることにも注意したい。

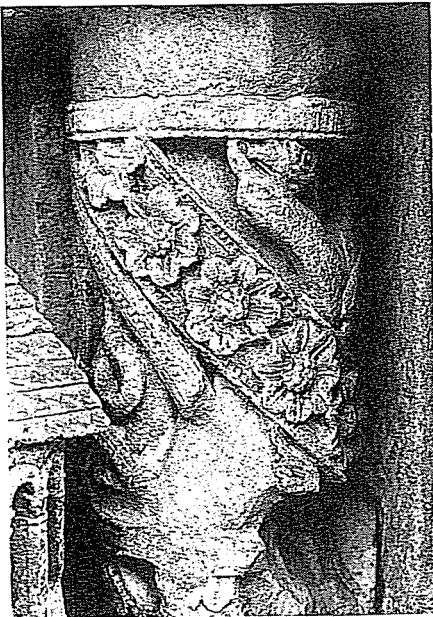
- (註24) Chartres, Archives départementales d'Eure-et-Loir, Série V 40: "Du 1 au 4 avril 1859. Sortir deux colonnes d'une chapelle absidale de la crypte, les porter à la façade Royale, les mettre provisoirement en place pour juger de l'effet évalué."; "du 6 avril 1859. Fourniture, taille et pose d'un morceau de pierre de Chauvigni pour un bout de colonne à la Porte Royale."; "du 10 mai 1859. Porter les colonnes qui étaient destinées pour un bout le porche nord de dedans la crypte, en transporter 5 au chantier de la façade royale pour y être retaillée et devant servir à la porte de la même façade..."; "du 1er au 2 juin 1859. Fourniture, taille et pose de 3 morceaux de pierre de Chauvigni pour le trumeau de droite de la porte Royale. Colonne, largeur: 0"22; longueur: 0"31; hauteur: 0"22..."
- (註25) 同上。"Débitage, taille et pose de quatre colonnes en pierre de liais appartenant à l'état pour la porte royale. Taille de 3 colonnes, longueur 10,32; largeur: 1m04."
- (註26) CHADEFAUX (C.), "Le Portail Royal de Chartres," in: *Gazette des Beaux-Arts*, LXXXVI (1970), pp.273-84, 特にp.281.
- (註27) これらの工事に関しては稿を改めることにする。
- (註28) SAUERLÄNDER (Willibald), *Gotische Skulptur in Frankreich, 1140-1270*, München, 1970.
- (註29) 彫刻家に関する情報を与えて下さったパリ第一大学教授レオン・プレスニール先生、そして私の手紙に御返事を下さったピュベリエ夫人とブルデ夫人に感謝致します。



1. 「王の扉口」 裝飾小円柱, 下のドラム(no.32: C.d.4.a.)の頂部左側面の欠損部がセメント状のもので埋められている。



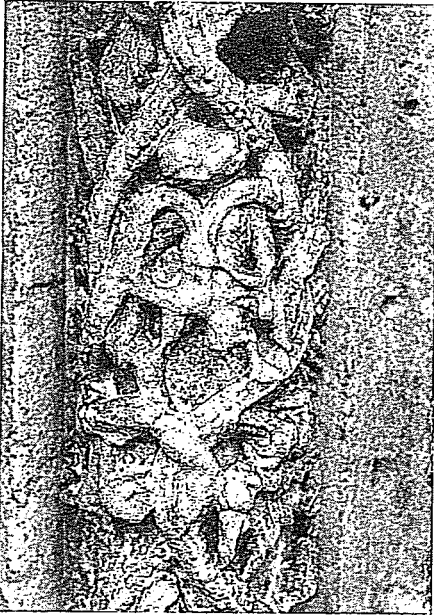
2. 「王の扉口」 裝飾小円柱, no.13: G.d.2.c.



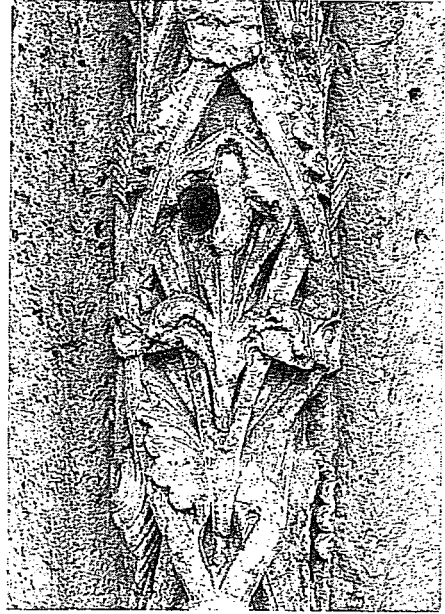
3. 「王の扉口」 裝飾小円柱, no.14: G.d.2.d.



4. 「王の扉口」 裝飾小円柱, no.26: C.d.1.a.



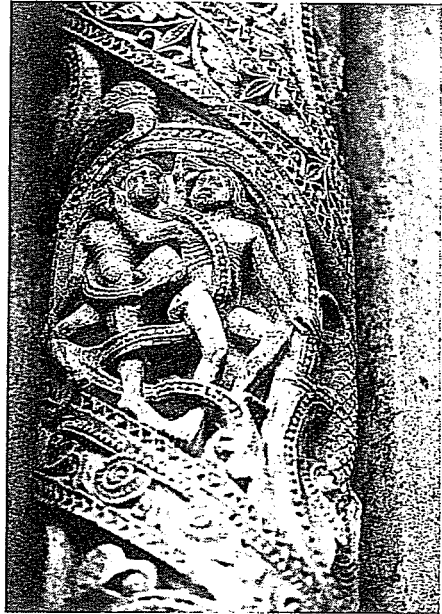
5. 「王の扉口」装飾小円柱, no.19: C.g.2.a., 右上に見られる穴が補強材を取り除いた跡.



6. 「王の扉口」装飾小円柱, no.28: C.d.2.a., 中央左に見られる穴が補強材を取り除いた跡.



7. 「王の扉口」装飾小円柱, no.42, 現在クリプトに置かれている. 部分. 当初はC.g.4.a.に位置していた. 黄道十二宮「双子座」の象徴.



8. 「王の扉口」装飾小円柱, no.45: C.g.4.a. (no.41,42のコピー). 部分.



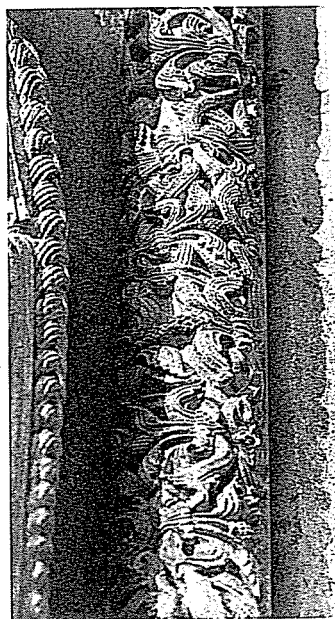
9. 「王の扉口」装飾小円柱, no. 42, 現在クリプトに置かれている。部分。当初はC.g. 4.a.に位置していた。黄道十二宮「魚座」の象徴。



10. 「王の扉口」装飾小円柱, no. 45: C.g. 4.a. (no. 41, 42のコピー)。部分。



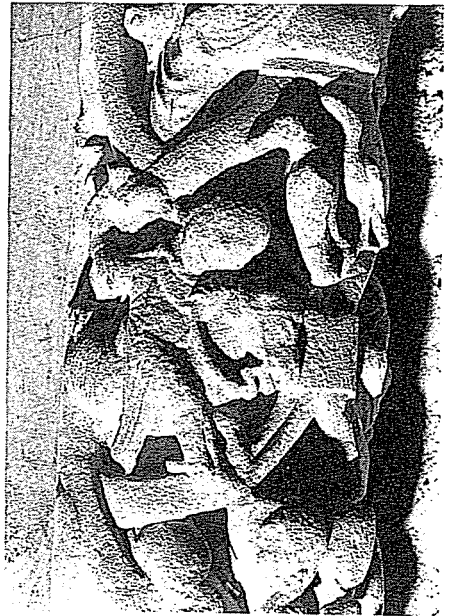
11. 「王の扉口」装飾小円柱, no. 43, 現在クリプトに置かれている。部分。当初はC.g. 4.b.に位置していた。



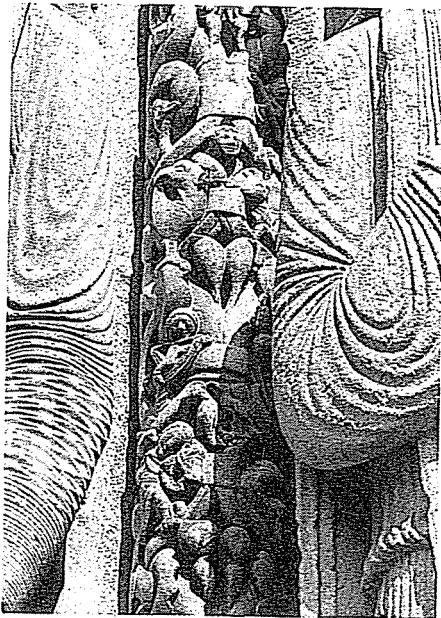
12. 「王の扉口」装飾小円柱, no. 46: C.g. 4.b. (no. 43のコピー)。部分。



13. 「王の扉口」装飾小円柱, no. 44, 現在クリプトに置かれている。部分。当初はD.g. 3. b. に位置していた。「十二ヶ月の労働」から「十月」(種を蒔く人)。



14. (図13)と同じ。「十二ヶ月の労働」から「五月」(鷹狩に出かける)。



15. 「王の扉口」装飾小円柱, no. 47 (no. 44のコピー)。部分。



16. 「王の扉口」装飾小円柱, no. 48: D. g. 3. c. (モデルの存在しない現代の創作)。